



# POLICY BRIEF

April 2014

Number 28

## 持続可能な開発のための質の高い教育 すべての人の持続可能で幸せな生活を実現するための優先課題

### 主なメッセージと提言

- ☺ 本ポリシー・ブリーフでは、教育開発の最優先課題を、教育へのアクセスと修学の達成(万人のための教育(EFA)とミレニアム開発目標(MDGs))から教育の質の強化に移行させる必要性を論じている。
- ☺ 質の高い教育は、持続可能な開発をあらゆる面で進めていく上で不可欠である。質の高い教育の強化は、持続可能な開発目標(SDGs)並びに2015年に開始予定の「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム」の基盤となっている。
- ☺ 質の高い教育は、ESDに関する包括的な視点と測定可能な学習目標・成果を組み合わせることによって強化できる。
- ☺ 本ポリシー・ブリーフでは、学習プロセスと教育内容の両方の課題に対処するESD学習パフォーマンス・フレームワーク(LPF)を紹介する。また、ESDの強化が全体的な教育の質をどのくらい高められるかを表すロードマップを提示する。
- ☺ LPFを次のような場面で活用することで、「持続可能な開発のための質の高い教育」の効果を大幅に高めることができる。
  - ✓ カリキュラム開発者: 変容的な教育的・教授のアプローチを盛り込んだ包括的な学校カリキュラムを設計。
  - ✓ 教員: LPFとその適用に関する研修を通して、ESDに関する能力を強化。
  - ✓ 学校管理者: 体験教育を重視した持続可能性のモデルとなる安全な学習環境を整備。
  - ✓ 教育政策立案者: 教育改革に変容的な学習アプローチを取り入れ、標準的な教育政策にESDの導入を検討。
- ☺ このように教育の様々な側面で活用することで、LPFは、教育政策立案、カリキュラム設計、授業内容、教授法、学習環境を十分な情報に基づいたものに向上させることができる。
- ☺ さらに、LPFは、国・地方における教育パフォーマンスのモニタリングだけでなく、持続可能な開発のための教育の10年(DESDE)の世界的進展状況、ESDに関するグローバル・アクション・プログラム、SDGsの評価を行う際の、測定可能で定性的な学習目標と進捗指標を策定する基盤を提供する。



ポール・オフェイ・メス

IGES持続可能な社会のための政策統合領域  
研究員/プログラムオフィサー  
ofel-manu@iges.or.jp



ロバート・J・ディッドハム

IGESプログラム・マネジメント  
オフィス  
シニア・コーディネーター/上席研究員  
didham@iges.or.jp

## 1 はじめに

近年、教育へのアクセスと修学の達成が大幅に向上したことを考えると<sup>1</sup>、これまで非現実的と考えられていた「質の高い教育」という目標に重点を置くことも大いに可能である。質の高い教育の強化は、持続可能な開発をあらゆる側面で進展させる上で必要とされており、それによって就労能力が高まるだけでなく、人間開発と地球環境の限界との緊張を緩和するための技能(スキル)と価値観を育むこともできる。持続可能な開発のための教育の10年(DESDE)は、持続可能な開発のための教育(ESD)を学習のあらゆる分野に組み込むことを推進し、質の高い教育を幅広い教育改革の優先課題にすることを強調している。これまでも、複数の国際的な教育イニシアティブで質の高い教育が提唱されているが、成果の定量化が難しいことから、具体的な活動の目標には引き続き教育へのアクセスと修学の達成が用いられている。本ポリシー・ブリーフでは、2015年に開始予定のESDに関するグローバル・アクション・プログラムや、持続可能な開発目標(SDGs)などの世界的取り組みにおいて、質の高い教育を主な優先課題に位置づける必要性を論じる。

ESDは質の高い教育とほぼ同義語と言える。しかし、ESDの実現には現代社会の教育機能を広範に変革させる必要があり、かつ持続可能な開発のための質の高い教育をどのように構築し実施するかが大きな課題となる。また、ESDによる学習パフォーマンスの有効性を体系的に評価することも難しく、特に持続可能性への寄与度の定義が困難である。

本ポリシー・ブリーフは、これらの問題に対処する「ESD学習パフォーマンス・フレームワーク(LPF)」を紹介し、ESDを実際に実施・評価する方法を提示する。さらに、教育内容と学習プ

ロセスを含むESDの主要要素を特定し、統合的かつ包括的なフレームワークを用い、これらを教育開発に導入することによって、質の高い教育を強化できることも示している。LPFの利用を推奨する対象には、教育政策立案者(国・地方の教育当局者)、実践者(カリキュラム開発者)、教員及び教育者、地域の学校管理者が含まれている。これほど多くの関係者の役割を扱う必要があるということはすなわちESDと質の高い教育の両方の実施における対象範囲の広さと複雑さを示している。

持続可能な開発アジェンダを達成するためには、人間の幸福実現における教育の中心的役割に焦点を当てた強力なSDGが求められる。そのような教育に関する目標を達成するには、質の高い教育の進展と持続可能な開発のための教育の両方に同時に取り組まなければならない。LPFは、この2つの教育的取り組みを橋渡しするためのロードマップも提示している。

本ポリシー・ブリーフの構成は以下のとおりである。まず、第2章では、包括的な教育開発実現における質の高い教育の重要性と、量的目標を越える進歩的役割に焦点を当てる。第3章では、ESDの包括的な視点と質の高い教育との統合、そして双方の重要な関連性について説明する。第4章では、LPFの開発と、LPFが効果的な教育内容と学習プロセスの両方を重視していることについて詳しく述べる。第5章では、LPFの基本的特徴を教育の質の向上に役立てる方法について検証する。第6章では、質の高い教育目標とESDを達成するための相互関係を促すLPFの仕組みを示すと共に、多様な関係者によるLPFを通じた学習パフォーマンスの改善について提言を行う。

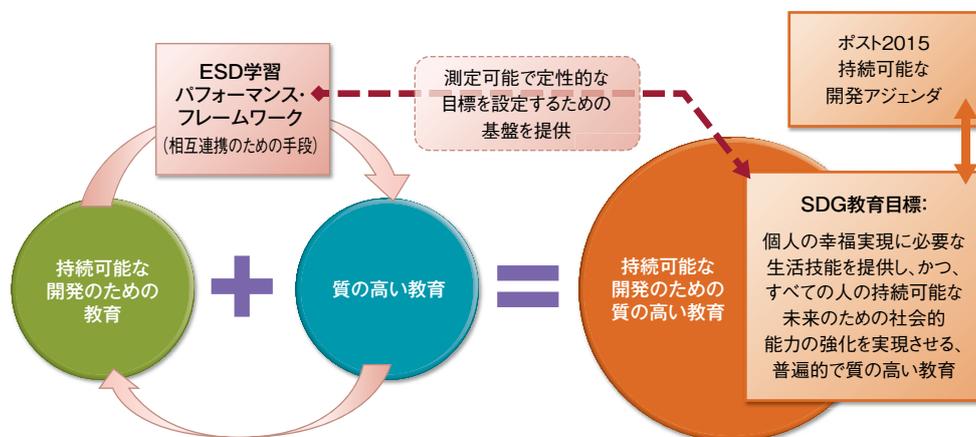


図1 教育に関するSDGの観点から見た(LPFを適用した)ESDと質の高い教育との関係

<sup>1</sup> UN, 2013a; UN, 2013b; Sustainable Development Solutions Network, 2013; Canadian International Development Agency, 2013; United Nations Secretary General, 2012.

## 2 質の高い教育: グローバルな教育改革への道筋

持続可能な社会の発展と人間の幸福を実現する上で教育が中心的役割を担っていることは広く認められている。2000年には測定可能な6つの目標を含む「万人のための教育(EFA)ダカール行動の枠組み」が採択され、同時期にミレニアム開発目標(MDGs)2及び3が定められた。これら全ての目標達成にはさらなる努力が必要ではあるものの、その後、教育へのアクセスと修学の達成は大幅に向上してきた。

これまでは教育へのアクセスと修学の達成が重視されるあまり、教育の内容、教授法の採用、適切な教員研修といった側面はあまり注目されてこなかった。しかし、次に挙げるような課題が残されるとともに、教育の量と質の議論も起きている。1) 就学率が上昇しているにもかかわらず学力が十分身につけていない(15~24歳の若者1億2,300万人以上が基本的な読み書き能力に欠けている)、2) 現行の教育システムでは未来の不確かな課題と変化に適応するために必要な技能と知識を習得できない(UN, 2013a)。これらを改善するためには、記憶や暗記学習を中心とした学業成績と認知スキルの向上という目標から脱却し、社会的一体性やグローバル・シチズンシップ、創造力、社会的・情緒的発達を目指す教育、並びに非認知的・情動的スキルの学習へと移行する必要がある(UNESCO BKK, 2013)。また、今後は質の高い教育をより重視するとともに、それを目指す取り組みと共に質の高い教育の原則を強化する政策も実施しなければならない。そのためには、1) 教育機関・プログラムの利用しやすさ、2) 最も困難な状況に置かれた人々を含む教育アクセスの確保、3) 形式と内容の妥当性(教育内容と学習プロセスが

相互に関連し良質であること)、4) 絶えず変化する学習者と社会的ニーズへの適応(GCE, 2013)の確保が必要となる。

質の高い教育の中核的原則は普遍的である。他方、教育の成果は、1) 生徒と教師が学習領域に何をもちたすか、2) 教育・学習アプローチの妥当性、3) 学習者によって教育がどう活かされているか、など様々な基準に左右されるため、それぞれの実情に合わせて適用しなければならない。従って、質の高い教育では以下の要素を考慮する必要がある。

- 学習者の学習前の世界観と心理(例: 子どもの家庭環境)
- 教師の能力
- 多様な社会的主体(個人、団体、コミュニティ、社会など)との相互関係
- 学習環境と教育環境
- 学習教材の内容と教育・学習プロセスの種類
- 知識構築の力学とその活用
- 学習・教育評価様式
- 文化と言語の影響力
- 平等を促進する持続可能なライフスタイルに関する個人の価値観

質の高い教育は、人間と社会の発展に多大な利益となり、資源コストも少なく済むことが多いため、付加価値をもたらす(Didham and Ofei-Manu, 2013)。質の高い教育の追求にあたっては、学習パフォーマンスを強化し、持続可能な未来で直面しうる課題への対処能力を学習者が身に付けることに焦点を当てるべきである。

## 3 質の高い教育の追求とESDの視点の統合

ESDに関するボン宣言(2009)は、教育によるエンパワーメントの重要性を強調し、「教育の質は、持続可能な生活及び社会や適正な職業への参加に必要な価値観、知識、技能、能力を育むものでなければならない」と記している(UNESCO, para. 4:1)。グローバルな持続可能性に関する様々な危機対処能力は、質の高い教育への包括的アプローチによってもたらされる。ESDの教育的解釈は主に2つあり、1つはESDを学習者に適切な知識、態度、価値観を移転させる手段とみなすことである。2つ目は、日々の生活で意識的に持続可能な選択を行い、発想やライフスタイルを転換するために集団的対話を通して協調しながら問題を追究する能力を育むことである(UNESCO, 2009)。2つ目の解釈では、従来の教授法を改め、教育の質を高めることもESDの目的とみなしている。

現在、新興工業国では、教育へのアクセスと修学の達成及び教育の継続的改善の重要性が再確認されている。一方、多くの高所得先進国は、EFAとMDGsのアジェンダからさらに進んで、教育システムの質的向上に取り組み始めている。このような教育の質的向上は、学習者が未来の社会や経済に必要な技能を備え、生徒の学習到達度調査(PISA)など国際的な学力評価で競争力を発揮できるようになることを目指している。ただし、雇用の可能性や社会的スキルばかりに焦点を当てて持続可能性(例: 21世紀型スキルの教育、PISA)を考慮しない教育は、持続可能な開発に貢献する可能性が低いだけでなく、現在直面している問題を悪化させる恐れがある。

このように、ESDの視点と測定可能な学習目標・成果を取り入れた質の高い教育は、グローバルな教育改革・改善の道筋として、2015年に開始予定のESDに関するグローバル・アクション・プログラムと2015年以降のSDGsの基盤となるべ

きである。アジア太平洋地域では、革新的なカリキュラム内容と学習目標、進歩的な教育アプローチと教育理論、持続可能性志向の教材、実施基準、ESD教育の監査メカニズムの採用が強く求められている(Didham and Ofei-Manu, 2012)。

## 4 ESD学習パフォーマンス・フレームワーク(LPF)

筆者らは、学習の内容だけでなく、方法も考慮した包括的な視点を用いて質の高い教育とESDを結びつけ、我々を取り巻く世界を理解するためのLPFを開発した。LPFは、いくつかの重要な教育理論を分析し、複数のケーススタディの文脈の中で検証することによって効果的なESDの基本的要素を特定した2年にわたる研究プロジェクトに基づいて構築されている。

プロセスを通して開発された。このプロセスは持続可能性の学習に不可欠とみなされている。

かつてはESDの要素を統合させた測定可能で実用的なフレームワークがなかったため、ESDの実施状況(及び持続可能な開発への貢献度)をモニタリングし、その有効性を評価することが困難であった。LPFはこれらの要素を特定し、使用可能なフレームワークの中に組み合わせてESDの実用的定義を提供することを目的に設計されている。また、LPFは実践例の調査と既存の教育理論の評価という行動と内省の循環

プロセスを通して開発された。このプロセスは持続可能性の学習に不可欠とみなされている。

LPFは、ESD学習パフォーマンスの4つの要素に基づいた効果的なESD実践を定義し、学習プロセスと教育内容を区別している。学習プロセスには進歩的教授法と協調的学習関係が含まれ、教育内容には持続可能性能力及び理解と世界観のフレームワークが含まれる(図2)。このようにLPFは、効果的なESDの設計・実践の具体的な指針としての役割を果たすと共に、ESDの質的成果をモニタリングする進歩的指標の開発基盤を提供している。さらにLPFは、包括的なESDの視点を幅広い教育開発に組み込むことにより、質の高い教育を強化するための運用モデルも提示している。

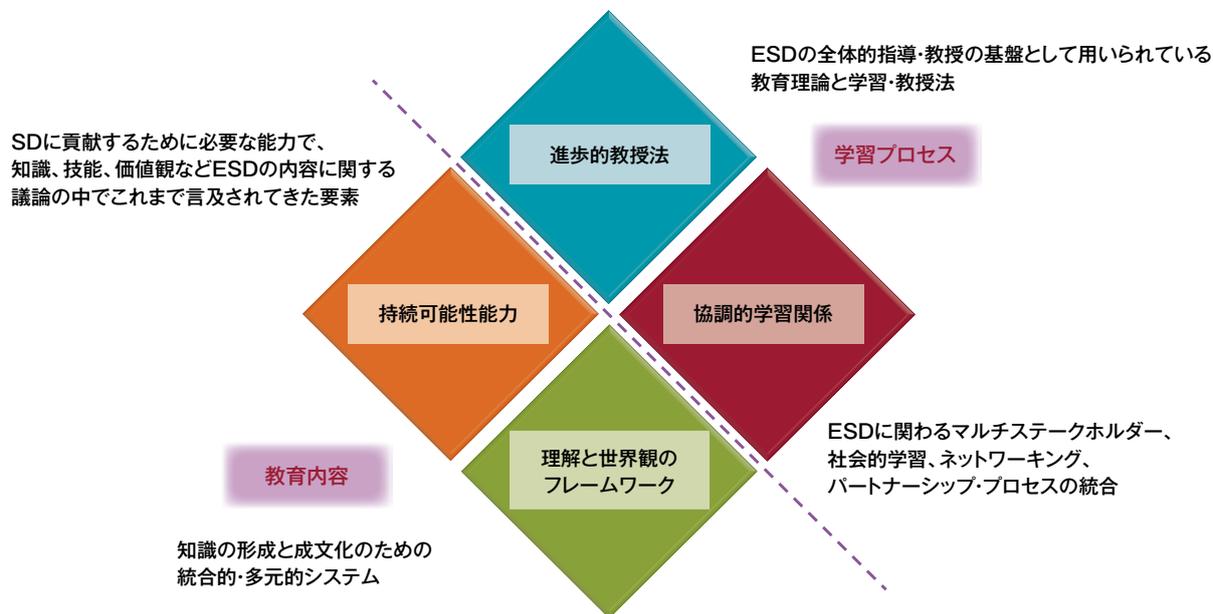


図2 ESD学習パフォーマンス・フレームワーク(LPF)

## 5 LPFの基本的特徴及び質の高い教育との連携

本章では、ESD LPFに含まれる4つの教育的・教授的要素について概説する。

### A. 進歩的教授法(Progressive Pedagogies: PP)

進歩的教授法(PP)とは、ESDフレームワークの下で教授的アプローチを統合し、個々の理論、手法、ツールという枠を超えて実践へと拡大することで、現在の経済・社会プロセスの持続不可能性及び個人・集団の行動が与える影響への意識向上を促すものである。PPは、様々な課題の理論的・実践的側面を考慮しながら、協調的探究と問題解決を含む学習と知識形成のプロセスに学習者が積極的に参加するために必要な空間を作り出す(Columbia University, 2012)。PPアプローチでは、生徒を抽象的な知識の受動的な受け手とみなすのではなく、学習者を学びの世界の中心に置き、批判的内省

と情報の検証を含めた積極的な学習プロセスを促進することによって、知識を現実世界の応用と関連させて文脈付けられるようにする。

PPには以下の側面がある。1)教育・学習の心理的・社会的側面への注目、2)研究・地域学習への積極的な参加による体験と学習者の個人的体験の重視、3)生徒による教育プロセスの批判的内省と現実世界での問題解決に焦点を当てた教育の体系化の奨励、4)自らの行為・行動がこれらプロセスから受ける影響と与える影響に関する学習者の分析力・理解力の強化、5)従来の教授法の人間中心的側面から脱却した学習の促進、6)学習者と地球の健全性の両方にとって有意義な教材が盛り込まれたカリキュラムの形成(Columbia University, 2012 and Gadotti, 2010)。

表1 進歩的教授法の特徴

- 批判的内省・実践及び問題解決
- 行動・経験志向で生徒主体の学習
- 反復的相互作用を通じた知識生産
- 生涯学習
- 集団的(協調的)探究の循環プロセス

### B. 協調的学習関係

#### (Cooperative Learning Relationships: LR)

協調的学習関係(LR)とは、グループ学習、ネットワーク作り、協調、パートナーシップ、集団的知識形成をESDの重要な教育的要素とすることで、社会学習、実践コミュニティ、協調／協力的探究などの教育方法・アプローチが含まれる。通常対象となるのは、当面の解決策がないテーマや分野に共通の関心を持つ学習者で、マルチステークホルダーの参加、協調的關係、一定期間にわたるアイデアと戦略の共有を重視しながら、解決策と革新を生み出すために再帰的かつ包摂的な信頼構築の機会を形成する。LRは、持続可能な開発に内在する未知の事実を調べる上で有益な内省的事実調査方法を提供し、LR教授法によって持続可能性を持つ多様な側面の相互関連性への理解が高まる。

LRには以下の側面がある。1)簡単な答えのない問題をオープンに敬意を持って検証するための共通のプラットフォームを形成する、2)社会資本の力を活用するための市民参加を促進する、3)個人の多様な強みを活かした協調的行動の力を認識する、4)複雑な相互関係における変化の力学を理解するためのシステム思考を採用する、5)集団的責任がもたらす好ましい相互依存を活用する(互いに頼り合いながら各自の成果の集合として全体的な目標を達成する)、6)各自が責務を果たすことを目的としたグループ参加者全員の説明責任を確保する、7)信頼構築、リーダーシップ、意思決定、紛争解決の育成・実践を通じた協調的スキルの適切な活用を促進する、8)共通の目標・目的設定時のチームメンバーによるグループ処理を可能にし、その成果を定期的に評価して効果を高めるために必要な変化を特定する(Wals, 2011)。

表2 協調的学習関係の特徴

- ・ (社会ネットワーク間の)相互関係のための包摂と内部構造ネットワーク、並びに重要な課題のフレーミングと民主的議論に対する自由度の拡大
- ・ 知識と情報理解の管理システムを構築するためのグループ処理
- ・ 参加と権限分担、当事者意識と共通点の共有
- ・ 役割の明確な定義と目的
- ・ 個人とグループの説明責任
- ・ 好ましい相互依存と信頼構築
- ・ 再帰的瞬間と言説の機会
- ・ 状況性とソーシャルスキル

C. 持続可能性能力

(Sustainability Competencies: SC)

持続可能性能力(SC)とは、持続可能性の課題に取り組みSDに貢献するために学習者が育むべき資質と性格を意味し、その基盤となるのは、考え、行動し、責任を果たすために必要な知識と能力を持つことである。従ってSCは、SDに関して有意義な形で他人や集団、社会と関わる能力と理解されている。SCはESD学習パフォーマンスの要素の1つであり、多様な知識、スキル、価値観で構成され、ESDの内容に関する議論の中で主に言及されてきた。

SCに必要な知識能力には分野固有の内容が含まれる。例を挙げれば尽きないが、表3にその一部を示している。ESDに関連したスキルについても同様で、ESDに関するスキルベースの学習成果も事実ベースの学習と同じように学習プロセスを重視している。ESDを支える価値観は、極めて重要でありながら往々にして測定が困難なESDの情動的側面の基盤となる。

表3 持続可能性能力の特徴

知識	スキル	価値観
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 気候変動</li> <li>・ 災害リスク軽減</li> <li>・ 持続可能な消費と生産／持続可能な消費のための教育</li> <li>・ 伝統的知識</li> <li>・ 情報通信技術 (ICT) とESDにおける使用</li> <li>・ 幸福、開発、環境の質</li> <li>・ レジリエンスと社会・生態システム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 批判的・複合的思考</li> <li>・ 代替案の模索</li> <li>・ 現実世界での問題解決</li> <li>・ 未来志向</li> <li>・ 変化への適応と支持</li> <li>・ 社会的な行動、協調及び協力</li> <li>・ 紛争解決、交渉、創造力、想像力</li> <li>・ 学際的研究スキル</li> <li>・ 適応学習</li> <li>・ 課題の文脈付け</li> <li>・ 個人的内省、ビジョニング(ビジョンの創造)、変化の特定と変化の適応に対する同意</li> <li>・ システム思考と価値観重視の思考</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 敬意、思いやり、共感</li> <li>・ 慈善、社会的・経済的公正</li> <li>・ シチズンシップとスチュワードシップ (管理責任)</li> <li>・ エンパワメントとモチベーション</li> <li>・ コミットメント、協調、同情</li> <li>・ 自決と自立</li> <li>・ レジリエンス、楽観主義、忍耐力</li> <li>・ 自制、情熱、心の知能指数</li> <li>・ 自己主張と説得力</li> <li>・ 確実性と倫理的自覚</li> <li>・ 能力と好奇心</li> <li>・ 相互依存</li> </ul>

D. 理解と世界観(World-View: WV)のフレームワーク

理解と世界観(WV)のフレームワークは、知識の形成と文化の一般的なシステムを対象に、個人が多様な知識の意味を形成して現実を理解するために用いる文脈的な枠組みと構造の種類に注目している。ESDの文脈において、WVには学際的かつ統合的な性質があり、パラダイムシフトと関連している。従って、環境、社会、持続可能性の問題に関して解釈・理

解・行動する手段は、我々がどのようなレンズを通してこれらの問題を観察・理解しているかによって大きく左右される。世界観とは、複雑で時に分離した信念、イデオロギー、知識の構造で、自らを取り巻く世界について我々がどのように関わり理解するかを導いている(Guba, 1990)。ESDでは、システム思考、越境的思考、統合その他類似の概念によって人々の世界観が形成され、自然と環境に関する現時点での構想やコンセプト、

並びにそれらの劣化と向上に対する自らの寄与を批判的に内省し自問する機会がもたらされる。

WVには以下の側面がある。1) 体験的理解を統合し、個々の部分ではなく全体の創発特性に注目した全体システムの説明を形成する、2) 統合された様々な分野の視点に基づいて包括的な理解を得るための知識探究を構造化する、3) 全体システムが創発特性(システムの特徴)を通常どのように統合しているかについて重要な洞察を提供し、部分の集合よりもシステ

ムの方が優れている理由を理解する、4) 問題を全体としてとらえ、様々な部分が概念的境界を越えてどのように相互関連しているかを理解する、5) 考えや主張を批判的に検証し、非対称の力関係とその正当化手段を調査する、6) 学習者が持続可能性のレンズを通して世界を見る際の批判的探究能力と自己内省能力を強化する、7) 相対的な相違を同定し、社会との関わりの中で対象意識が発達する様子を確認する、8) 活動かデザインかを問わず、身近な状況の観察可能な反復パターンを認識する(Jones et al., 2010; Springett, 2010)。

表4 理解と世界観のフレームワークの特徴

- 全体論(Holism)と統合: 部分ではなく全体に注目
- システム視点または全体システム思考
- 学際的・越境的アプローチ
- 文化相対主義と社会構成主義
- パターン認識とパターンから詳細へのシステム設計(相乗効果)

ESD LPFには、ESD実践の教育・学習方法、活動、成果を進展させる効果を備えた、関連性はあるが明らかに異なる複数の要素を1つのフレームワークの下で統合させる機能がある。それによって広範なESDのフレームワークと概念が組み合わせられ、政策プロセスを支援し、確実な実施へと導くことができる。従って、LPFを適用すれば今後のESDの取り組みを地域・現場の実情に合わせやすくなり、それが成功事例の普及につながって最終的に社会の変化に寄与することができる。

さらにESD LPFは、質の高い教育と持続可能な開発のための教育という2つの重要な取り組みの橋渡しとして共通の

道筋を形成し、持続可能性とすべての人の幸福の両方を実現する手段も提供する。質の高い教育の重要性は、個人の幸福を追求するために必要な人生のスキルを学習者に与えながら、社会にもすべての人のための持続可能な未来を実現する力をもたらすことにある。このため教育に関する将来のSDGでは、相互に関連させた持続可能な開発のための質の高い教育を目指さなければならない。またLPFによって具体的な測定や評価の基盤が形成されるため、ESDに関するグローバル・アクション・プログラムなどの教育プログラムとSDGsのような開発アジェンダの教育的要素の両方を評価しやすくなる。

## 6 提言: ESD学習パフォーマンスの質向上

2015年以降の開発アジェンダ(及びSDGs)とESDに関するグローバル・アクション・プログラムについての最近の教育関連の議論・出版物では、質の高い教育を向上させる必要性が強調されており、質の高い教育の目標を達成するには以下のステップが不可欠である。

- 1) 適切に開発されたカリキュラムの採用
- 2) ESD能力を有する教員を育成するための研修の向上・拡大

- 3) 安全で効果的な学習環境の構築
  - 4) 教育・学習に対する変容的かつ協調的アプローチ
- これらのステップが重要な理由は、教育の成功は最終的に「何をどのようにどこで誰と学ぶか」によって左右されるからである。従ってESDに関連した質の高い教育を(特に正規教育において)実現するには上記の目的を果たすことが不可欠であり、以下の提言ではESD LPFとこれらの質の高い教育の目的との相関関係について明らかにする。

表5 LPFの要素と質の高い教育のためのステップ及び主な関係者・利用者との関係

質の高い教育を達成するためのステップ	効果的な学習パフォーマンスの4つの要素			
	持続可能性能力 (SC)	進歩的教授法 (PP)	協調的学習関係 (LR)	世界観の変化 (WV)
適切に開発されたカリキュラム	✓			
教育の質の向上		✓		
効果的な学習環境の構築			✓	
変容的学習の奨励				✓
	カリキュラム開発者、教科書作成者	あらゆる教育レベルにおけるESD教員、教育当局者／教育管理者	地域・現地の学校運営者／管理者	政策立案者、政策実践者、教育者、教員、地域・現地の学校管理者
関連／ターゲット関係者(各交差部分)				

ターゲットとなる主体と関連する教育目的及びLPFの要素を結びつける

ESD LPFは質の高い教育(及びSDGs)にESDの視点を統合することができる。また、そのためには以下を含む主な関係者の関与が不可欠である。

- ・ 国または地域の教育・ESD当局者などの教育政策立案者
- ・ カリキュラム開発者や教科書作成者などの実践者
- ・ 小学校から大学まであらゆる教育レベルの教員と教育者
- ・ 地域・現地の学校運営者・管理者
- ・ 研究者、評価・指標開発者及び実践者

LPFの要素は互いに関連し合っているため、すべてを並行して実施することが肝要であるが、質の高い教育を達成する上で効果的な学習パフォーマンスのどの要素が4つのステップ

のいずれかをサポートしているのかを特定することも可能である(表5参照)。例えば、適切に開発されたカリキュラムには、包括的な内容(SC)と教育の進歩的プロセス(PP)の両方が含まれている。また変容的学習の奨励の場合、状況によって程度はそれぞれ異なるものの、4つの要素全てが効果を発揮しなければならない。このように、目標を達成するには全ての関係者が良好な協調関係を築く必要がある。

教育的目的とLPF要素との関係を表6から表9にまとめた。ESDと結びついた質の高い教育の実現に必要な目的を達成するための提言と、各目的に関連するターゲット関係者も同時に示している。

表6 教育目的: 適切に開発されたカリキュラムの採用	
ターゲット関係者	カリキュラム開発者と教科書作成者
質の高い教育を実現するための目的の妥当性	質の高い教育には、豊かな内容、明確な学習方法論、進歩的な学習目的・目標を含む適切に開発されたカリキュラムが不可欠である。
主な学習パフォーマンス(LP)要素と目的との関連性	持続可能能力(SC)：SCの知識、スキル、価値観の要素の有無によってカリキュラムの質が示される。
<p><b>提言：</b>カリキュラム(国・地方レベルの両方)にはLPFを組み込むべきである。                  従ってカリキュラム開発者は以下を確保する必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ESD戦略と関連させたカリキュラムの構造・内容には、進歩的教授法の主な要素(例: 生徒中心、能動的、体験的、集団的探究、協調的・社会的アプローチ等。5.AとB参照)が含まれていなければならない。その目的は生涯学習能力を育成することで、学習者の人生の様々な段階における教育的ニーズに焦点を当てた「ライフサイクル」アプローチを用いたスキルベースの学習もその1つである。学習者は、安定した雇用と生計を確保するための備えを身に付ける必要がある。</li> <li>カリキュラムの教育的側面において、世界と地域の社会・生態システムを持続させるための感受性の高い倫理意識を着実に発達させる明確かつ進歩的な学習目的・目標を設定する。</li> <li>カリキュラムに変容的学習を促進する学習アプローチと教材が採用され、LPF要素と個々の特徴が適切に関連付けられている。</li> <li>ESDカリキュラムの内容に地域・現場での適合性と文化的適切性が考慮されている。</li> <li>評価アプローチと評価内容、特にクラスルームレベルでの形成的・累積的評価の採用に関する明確な方向性が示されている。</li> <li>マルチメディアやICT、体験・コミュニティベース学習、スキルの共有など新たな知識・スキル交換手段がカリキュラムで活用されている。</li> <li>教育内容に関しては、時間・状況の経過に伴う持続可能関連テーマの増加に応じて、継続的な内容の進化をサポートするESDの柔軟性とダイナミズムを重視する必要がある。従って、持続可能性をめぐる議論に遅れをとらないようにしなければならない。</li> <li>SDとESDに関連する知識に基づいた能力について適切に扱う必要がある(5.C参照)、価値の取得とESD世界観の両方をカバーする価値に基づいた教育に特に重点を置くべきである。</li> </ul> <p>教科書作成者は、LPFに精通し、教科書の内容を構成する際にLPFを採用すべきである。</p>	

表7 教育目的: 教員研修の向上と拡大	
ターゲット関係者	あらゆる教育レベルのESDの教員、教育者、実践者
質の高い教育を実現するための目的の妥当性	質の高い教育には、教授法・学習方法論(包括的で学際的な教育的視点を含む)に関する研修を通じた教員の能力構築が不可欠である。
主なLP要素と目的との関連性	進歩的教授法(PP)：教員が適切な内容の策定と進歩的な教育・学習アプローチの採用に関する能力を備えることで、教育の向上に貢献できる。
<p><b>提言：</b>教育のあらゆるレベルのESD教員、教育当局者、管理者、実践者は、教育・学習教授法、ESD知識の内容、スキル、価値観を含むESD学習パフォーマンスの教育・達成に必要な専門知識を身に付けるべきである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>未来の教員は就業前に、読み書き・計算能力に関する基本的な研修だけでなく進歩的教授法と学習方法論に関する研修も受けるべきである。同研修には、生徒が自己と他者の視点に基づいて状況を分析できるようにすることを目的とした教育に対する包括的で学際的な視点と多角的視点のアプローチ(例: 様々な状況に応じた多角的な科目と価値観の活用)が含まれる。</li> <li>大学、教育学部、教育大学の職員は、以下を含むLPFの要素と特徴を用いた十分な情報に基づいた教員教育戦略を策定する必要がある。1) 現任教員への研修提供に関する各機関の責任拡大、2) 変容的学習と教員対象の教育研究を目的とした質の高い教育に関する系統的な専門能力開発。</li> <li>現役の教員は、創造性と適応性のある教育を行うためにカリキュラムの「ローカリゼーション」、授業計画、評価方法に関する権限を与えられるべきである。さらに教員は、効果を高めるためにLPFの文脈で自主的に教育的・教授的目標を再設定できるようにすべきである。</li> <li>集団的対話と生徒との内省を実施するために評価プロセスの焦点を定め直す。教員は、生徒のニーズに合わせたより良い教育を行えるように、認知と能力に基づく評価を活用した形成的評価と累積的評価の両方の採用を強化すべきである。</li> </ul>	

表8 教育目的: 安全で効果的な学習環境の構築	
ターゲット関係者	学校運営者／管理者(地域・地方の両方)
質の高い教育を実現するための目的の妥当性	安全で効果的な学習環境を構築することで、参加型かつ体験に基づいた学習を行うダイナミックな機会がもたらされ、それを持続可能な実践と質の高い教育の手本とすることができる。
主なLP要素と目的との関連性	LRに記載されている協調的学習関係は、相互信頼と社会的な絆を構築し、物理的環境が満たされるとともに、生徒の情緒的安心感も高める。
<p><b>提言:</b> 学校運営者はLPFを活用して以下を実施することができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 統合的で全校的な教育アプローチを用いたLR及びWV側面の適用と持続可能な実践のための学習環境モデルとしての学校開発。これは学校間の協調的ネットワークや資源の相互利用だけでなく、学校運営や施設にも適用することができる。</li> <li>• 学習プロセスの効果及びESD関連活動・学校プロジェクトなどの取り組みの教育内容を評価して改善に有益な情報を得ることを目的としたLPFの活用。</li> <li>• 周囲の生態系とのつながりを強化し、参加型かつ体験に基づいた学習を行うダイナミックな機会をもたらす安全で適切な学習環境(仲間同士の交流を含む)の提供。</li> <li>• 地域のニーズを満たし、強力な社会的つながり、信頼構築、シチズンシップを促進するために、学校をコミュニティ学習、地域参加、学習機会におけるハブにする。</li> </ul>	

表9 教育目的: 教育・学習に対する変容的アプローチ	
ターゲット関係者	教育政策立案者・当局(例: 国・地域の教育当局者)、カリキュラム開発者、生徒、教員・教育者、学校運営者、ESD指標開発者・実践者
質の高い教育を実現するための目的の妥当性	生徒を協調的学習プロジェクトに参加させて現実世界の問題解決を目的とした批判的分析と問題解決に取り組ませる教育及び学習は「変容的」スキルの育成に役立つ。
主なLP要素と目的との関連性	世界観(WV)の変化: 関係者が現行の教育システムに固有の欠陥に気づきやすくなる。批判的内省と他の情動的結果の利用によって、特に変容的教育・学習のための価値観、やる気、欲求、能力が強化される。
<p><b>提言:</b> 質の高い教育を達成する最適な場所は現地の学校または教室であるが、十分な財源・人材を提供し、導入を義務付けるには国レベルの支援が必要である。従って、政策立案者と政府職員はESD WVの取り組みに最善を尽くすべきである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 政策立案者と政府職員は、ESD関連の政策を国の教育政策(カリキュラム内容を含む)の枠組みに組み込み、省庁間の効果的な協力を義務付けるべきである。</li> <li>• 関連機関、特に教育省と環境省は、ESDを導くために確固としたビジョンと強力なリーダーシップを示す必要がある。</li> <li>• 包括的で統合的かつ学際的で系統的に取り組むには、教員及び他のESD実行責任者が十分な知識と専門技能を備えていなければならない。大学、教育管理者等が様々な形で研修を提供することもできるが、政府当局による財政支援が必要である。</li> <li>• 教員は、生徒の体験を向上させるために変容的かつ生徒中心の学習に基づいた教育アプローチを採用する必要があり、LPFからは以下を含めるべきである。1) 学習計画(シラバス)デザインへの生徒の参加や協調的／参加型学習活動・プロジェクトを通じた知識構成、2) 現実世界の問題の代替案を考えて解決策を模索することを目的とした協調的探究、実地研究、現地視察など批判的分析や問題解決のスキルの育成、3) スキルベースの学習を実証するためのESD視点を取り入れたパフォーマンスに基づく評価の採用、4) 教育の提供から学習の促進への転換。</li> <li>• 教員は、生徒間、生徒と教員、生徒と社会全体との健全な関係と信頼を構築するためにLRを利用すべきで、それにより生徒のパフォーマンスを向上させる情緒的・物理的に安全な環境を形成しやすくなる。</li> <li>• ESDの指標開発者と実践者は、定性表示・評価にLPFを利用すべきである。</li> </ul>	

## 7 結論

DESD、EFA、MDGs、ESDに関するグローバル・アクション・プログラム、SDGs等重要な国際的イニシアティブの中で教育の今後の方向性が議題になっている。本ポリシー・ブリーフは、これらイニシアティブにおいて、質の高い教育に優先度を置き、これまでのような教育へのアクセスと修学の達成を重視することから脱却する必要があると主張している。質の高い教育システムは量的・質的両方のインプットで構成され、政策レベルでの支援を提供しながら、実践レベルでの成果やアウトプットの特徴も重視している。ただし、質の高い教育が妥当性を得るには、ESDの視点を取り入れて、世界が直面する現在・未来の課題への対処能力を学習者に身に付けさせる必要がある。

本ポリシー・ブリーフは、ESDを教育の主流に位置付けるための手段として、また教育システム全体でESDに基づいた質の高い教育を強化する有益な評価ツールとして、ESD LPFの採用を提言している。また、LPFのさらなる適用・検証は、世界規模の新たな教育的枠組みへのESDの移行・導入を支援し、SDGsの教育目標設定にも大いに貢献する。最後に、LPFに質的成果指標を加えることで、ESDの明確な実用的定義を示しやすくなるだけでなく、モニタリング・評価プロセスを強化・促進することができる。

■ 参考文献

- Canadian International Development Agency (2013) "Achieve Universal Primary Education (MDG 2)". Ottawa: Foreign Affairs, Trade and Development Canada; Government of Canada. [<http://www.acdi-cida.gc.ca/acdi-cida/ACDI-CIDA.nsf/En/JUD-13175929-H9K#tph>]
- Columbia University (2012) "Progressive Pedagogies". New York: Columbia University. (Accessed on 14 February 2012): [<http://www.columbia.edu/cu/tat/pdfs/progressive.pdf>]
- Didham, R.J. and Ofei-Manu, P. (2012) *Education for sustainable development: Country status reports. An evaluation of national implementation during the UN Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) in East and Southeast Asia*. Hayama, Japan: IGES and UNU-IAS.
- Didham, R.J. and Ofei-Manu, P. (2013) *Advancing education for as a goal for sustainable development*; IGES Issue Briefs on SDGs Series. Hayama, Japan: IGES.
- Gadotti, M. (2010) "Reorienting Education Practices Towards Sustainability"; *Journal of Education for Sustainable Development*; 4 (2): 203-211.
- GCE (Global Campaign for Education) and Beyond2015 Partnership (2013) "Making Education for All a Reality"; Prepared as part of Global Thematic Consultation on Education and the Post-2015 Development Agenda. [<http://www.worldwewant2015.org/node/340073>]
- Guba, E. G. (1990) "The alternative paradigm dialogue"; E. G. Guba, ed. *The paradigm dialogue*. Newsbury Park. CA: Sage.
- Jones, P., Selby, D., and Sterling, S. (2010) "More than the sum of their parts? Interdisciplinarity and Sustainability"; Jones P. Selby D. and Sterling S., eds. *Sustainability Education: Perspectives and practice across higher education*. London: Earthscan.
- Springett, D. (2010) "Education for Sustainability in the Business Study Curriculum: Ideological Struggle"; Jones, P., Selby, D., and Sterling, S., eds. *Sustainability Education: Perspectives and practice across higher education*. London: Earthscan.
- Sustainable Development Solutions Network (SDSN) (2013) "An Action Agenda for Sustainable Development: Report for the UN Secretary General"; Report for the UN Secretary-General. New York: UNSDSN. [<http://unstats.un.org/unsd/broadenerprogress/pdf/130613-SDSN-An-Action-Agenda-for-Sustainable-Development-FINAL.pdf>]
- UN (2013a) *The Millennium Development Goals Report 2013*. New York: UN. [<http://www.un.org/millenniumgoals/pdf/report-2013/mdg-report-2013-english.pdf>]
- UN (2013b) "A New Global Partnership: Eradicate Poverty and Transform Economies through Sustainable Development – The Report of the High-Level Panel of Eminent Persons on the Post-2015 Development Agenda". New York: UN. [[http://www.un.org/sg/management/pdf/HLP\\_P2015\\_Report.pdf](http://www.un.org/sg/management/pdf/HLP_P2015_Report.pdf)]
- UNESCO (2009) "The Bonn Declaration". UNESCO World Conference on Education for Sustainable Development, Bonn, Germany, 31 March – 2 April 2009. [[http://www.esd-world-conference-2009.org/fileadmin/download/ESD2009\\_BonnDeclaration080409.pdf](http://www.esd-world-conference-2009.org/fileadmin/download/ESD2009_BonnDeclaration080409.pdf)]
- UNESCO (2009) *United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) – Review of Contexts and Structures for Education for Sustainable Development 2009*. prepared by Arjen Wals; Paris: UNESCO.
- UNESCO APRBE (2013) "Beyond 2015- Educating for a Sustainable Future: Key Considerations for the Development of the Post 2015 Agenda". Bangkok: UNESCO. [<http://www.unescobkk.org/education/news/article/beyond-2015-education-for-the-future/>]
- United Nations Secretary General (2012) "Global Education First Initiative: An Initiative of the United Nations Secretary General". New York: UN. [[http://www.globaleducationfirst.org/files/GEFI\\_Brochure\\_ENG.pdf](http://www.globaleducationfirst.org/files/GEFI_Brochure_ENG.pdf)]
- Wals, A. E. J. (2011) "Learning our way to sustainability"; *Journal of Education for Sustainable Development*; 5 (2): 177-186.

■ 謝辞

筆者は、概念的説明において指導頂いたエリック・ザスマン博士、並びに主なメッセージの洗練化・明確化において尽力頂いたマーク・エルダー博士に感謝の意を表す。また、貴重なコメントと支援を頂いた井村秀文教授と李昭始博士、そして日本語訳のチェックを頂いた宮澤郁穂研究員に感謝したい。本書は、国連大学高等研究所 (UNU-IAS) とIGESがUNESCOアジア太平洋地域教育局の協力を得て実施した2年に及ぶ (2011～2013年) アジア太平洋地域における持続可能な開発のための教育のモニタリング及び評価 (M&E of ESD) に関する共同研究プロジェクトに基づいて作成された。

本プロジェクトに関する詳細：

<http://www.iges.or.jp/en/integrated-policy/esd-me.html>

公益財団法人 地球環境戦略研究機関

〒240-0115 神奈川県三浦郡葉山町上山口2108-11

TEL: 046-855-3700 FAX: 046-855-3709 E-mail: [iges@iges.or.jp](mailto:iges@iges.or.jp) <http://www.iges.or.jp>

Copyright © 2014 Institute for Global Environmental Strategies. All rights reserved. この出版物の内容は執筆者の見解であり、IGESの見解を述べたものではありません。